

論文の内容の要旨

論文題目 日本語連体修飾節とドイツ語関係節の対照研究

氏 名 城本 春佳

本論文は、日本語とドイツ語のいわゆる「関係節」（主名詞が修飾節述語の項またはその付加語として解釈可能な構文）を対象に、一方の言語では関係節で表現可能なものが他方の言語では表現できない（または完全に不可能ではなくとも非常に不自然になる）場合について、なぜ言語間でそのような差異が見られるのかについて検討し、両言語の当該構文の、構文的・意味的・談話機能的特徴を明らかにすることを目的とするものである。

まず第一章では、日本語の連体修飾節とドイツ語の関係節について、類型論的な観点からその構文的な相違点をまとめた。ドイツ語では関係詞が主名詞と修飾節述語との意味関係を明示するのに対し、日本語では主名詞と修飾節述語との意味関係を明示する文法的な要素はなく、主名詞が修飾節と直接結びつく形で様々な意味関係を表し得る。本論では、日本語の連体修飾節を、主名詞と主節の意味関係から 5 つに分類し、ドイツ語の構文との対応を以下の図のように示した。

日本語	①関係節	②内容節	③相対名詞修飾節		④語用論的 修飾節	⑤主要部内在 型関係節
			事柄・空間的相対性	時間的相対性		
ドイツ語	関係節	dass 同格 節	da-前置詞＋ dass 同格節		—	—
			副詞節			

図 1 日本語の各連体修飾節構文とドイツ語の構文との対応関係

第二章では、ドイツ語では関係節構文で表現できる内容が、日本語では連体修飾節構文で表現することが難しい以下のような例を出発点に、ドイツ語の非制限的關係節の持つ談話機能について検討し、日本語の連体修飾節との対照を行った。

(1) Er suchte eine Telefonzelle, die er schließlich auch fand.

he looked-for a phone-booth REL he finally also found

(2) *彼はとうとう見つけた電話ボックスを探した。

ドイツ語の(1)のような関係節構文は「継続的關係節」と呼ばれ、「主節の内容を更に進める」または「注釈やメタテキスト的コメントを表す」とされている(Duden 2016, Helbig1980 ら)。通常の非制限的關係節(＝同格的關係節)と継続的關係節の対立は、その構文の特徴から、Cinque (2008)によって指摘されている、非制限的關係節に通言語的に見られる2つのタイプ、すなわち文文法レベルで先行詞と結びつく「integrated タイプ」と、談話文法レベルで先行詞と結びつく「non-integrated タイプ」の対立に相当するものと考えられる。

またこれまでの非制限的關係節に関する記述では、「主節の内容を先に進める」ものと、「注釈やメタテキスト的コメントを表す」ものという、二つの異なる談話機能を持つものがどちらも継続的關係節と見なされていた。そこで本論では、ストーリーラインへの関与の仕方という談話機能の観点から、非制限的關係節を「同格的關係節」「継続的關係節」「挿入的關係節」の三つに分類することを提案した。「同格的關係節」はストーリーラインに間接的に関与し、談話の理解を助ける従属的な情報を表すもので、統語的にもより主節に従属的な特徴を持つ。「継続的關係節」はストーリーラインに直接的に関与し、談話を更に先に進めるものである。統語的にも、より主節から独立した等位接続相当の特徴を持つ。ただし、関係詞による先行詞指示と、動詞が後置されているという従属節の形式を持つことで、独立文の連続よりも談話の結束性を示すことができる。「挿入的關係節」はストーリーラインを逸脱した注釈やコメントなどの情報単位をもつ。音韻的には節前後の休止や、表記的にはダッシュや括弧で前後の文脈からの逸脱が表される他、対人的なモダリティ要素を含むことでストーリーラインを逸脱して聞き手に直接働きかける機能を持つ。

日本語の連体修飾節は、この3つの談話機能のうち、「同格的關係節」に相当する談話機能しか持ち得ない。これはドイツ語関係節と日本語連体修飾節の構文的な相違を反映するもので、ドイツ語関係節は主名詞に後接するだけでなく、主節の後ろに置かれ得るため、主節に後続する叙述内容を表すことができるが、日本語の連体修飾節は主名詞に前接していなければならない、修飾節述語は主節述語より前に置かれるため、主節に後続する叙述内容を表すことは難しい。また、ドイツ語関係節は関係詞の指示機能によって、ストーリーラインを逸脱しても談話の結束性を示すことができるが、日本語連体修飾節は関係詞を持たないためそれができない。更に日本語の連体修飾節は対人的なモダリティを含むことができないので、ストーリーラインを逸脱して聞き手に直接働きかけることはできない。

第三章では、日本語では関係節相当の連体修飾節構文で表現できる意味内容が、ドイツ語

関係節では同等の意味解釈を得ることが難しい以下のような例を出発点に、主名詞に対する意味付与のあり方について日独語間で対照を行った。

(3) [化粧をしている]花子は女優のようだ。

(4) Hanako, [*die schön geschminkt ist*], sieht wie eine Schauspielerin aus.

Hanako REL beautifully made-up is looks like a actress AFF

(3)は、「化粧をしているときの花子は女優のように見える」という、修飾節が主名詞を時空間上で制限する解釈が可能であるのに対し、これを逐語訳したドイツ語の例文(4)は、「花子は今（またはいつも）化粧をしていて、女優のようである」という解釈が自然であり、日本語のように主名詞を時空間上で制限する読みは難しい。日本語の非制限的連体修飾節が、主名詞の指示対象を時空間上で制限する読みが可能となるのは、修飾節が特定の時点と結びつかない一般事態を表すものとして解釈可能な場合である。ドイツ語でも、関係詞が自由変項である制限的關係節及び分詞や形容詞による名詞修飾の場合には、修飾要素が一般事態を表すものとして解釈され、それ故主名詞を時空間上で制限する読みが可能となるが、非制限的關係節では、関係詞が指示的であることから、自由変項を含まない特定の事態を表すものとして解釈され、主名詞を時空間上で制限する読みができない。このことから、ドイツ語の非制限的關係節は常にそれ自体が独立した時制を持って時空間項を取るのに対し、日本語の非制限的連体修飾節は（絶対時制の場合にはドイツ語の非制限的關係節同様それ自体が時空間項をとることもできるが）独自の時制を持たず、主節の命題と結びついたうえで時制を取るという、より主節に従属した特徴を持つことが明らかとなった。

第四章では、ドイツ語のいわゆる「**wie** 関係節」について議論した。**wie** 関係節にも制限用法と非制限用法があり、制限的 **wie** 関係節は日本語のヨウナ節と同等の意味機能をもつ。制限的 **wie** 関係節とヨウナ節は共に、修飾節が表す集合 **X** を参照点とし、それに「類似するもの」を含む支配領域が設定されて、主名詞の指示するターゲットが検索されるという意味解釈プロセスを持つと考えられる。また非制限的 **wie** 関係節には、「付帯状況」と「背景的な情報付加」の二つの用法があることを示した。「付帯状況」は時間副詞節を導く **wie** の機能と連続的に捉えられるものだが、主節に後置され、後続の文脈と直接つながるという点で「継続的關係節」とも類似する特徴を持つ。一方「背景的な情報付加」は主節の内容との意味的に密接に関わるものではなく、「挿入的關係節」に類似する特徴を持つ。

以上の観察及び考察から、日独両言語のいわゆる非制限的關係節にあたる構文について、ドイツ語ではより独立文に近い、主節に埋め込まれていない特徴を持ち得るのに対し、日本語では独自の時制を持たない、より主節に埋め込まれた特徴を持ち得ることが明らかとなった。両言語の当該構文の対応関係を図示すると図2のようになる。

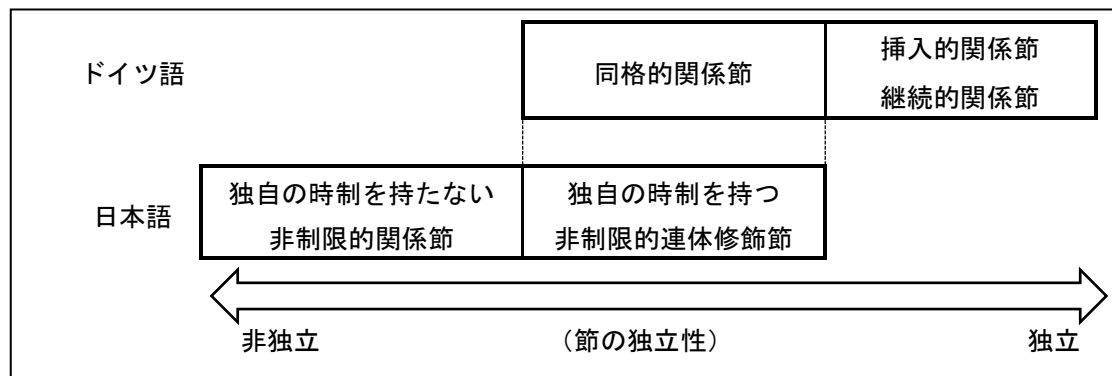


図2 ドイツ語の非制限的關係節と日本語の非制限的連体修飾節の対応